

大学生のグループ・ディスカッションの支援を目的とした グラウンド・ルールに関する調査

A Study on Ground Rules for Supporting Group Discussions Among University Students

中野 美香

Mika NAKANO

福岡工業大学

Fukuoka Institute of Technology

<あらまし> 教育実践の場や就職活動において大学生がグループ・ディスカッション (GD) に参加する機会は増えているが、GD 中の「やりづらさ」がパフォーマンスの発揮を妨げていることがある。そこで汎用的な GD の支援を目的として、経験者を対象にグラウンド・ルール (GR) に関する質問紙調査を実施した。全 13 回のうち後半 6 回の GD でグループごとに作成された合計 255 の GR を分析した。その結果、GR 導入後 4 回目以降は GR の数は減少していた。またこれらの GR は、「発表前」「GD 全体」「意見」「発表者」「聴衆」の 5 つのカテゴリに分類されることがわかった。これらの結果を基に効果的な GR の支援方法を提案する。

<キーワード> コミュニケーション, 遠隔教育・学習, 学習環境, 教育方法, 授業実践

1. はじめに

近年のテクノロジーの発展や社会状況の変化により、遠隔・対面に関わらず汎用的なグループ・ディスカッション (GD) 能力が大学生に求められている。コロナ禍の後、様々な場面で遠隔でのコミュニケーションが選択できるようになったと同時に、臨機応変な対応が必要な場面も増えた。一方で、GD における複数の発話者によるインタラクションは複雑であり、その状況での行動規範がわかりづらいことが「やりづらい」という感覚の原因になっていた (中野, 2022)。GD の「やりづらさ」はパフォーマンスの発揮を妨げ、モチベーションの低下や経験不足といった問題につながる可能性がある。

筆者はこれまでの研究で、反復的な GD が「やりづらさ」の解消に寄与していたことからグラウンド・ルール (GR) の有効性に着目し、初期熟達化を支援する研究をおこなってきた (中野, 2022)。GR は会議や話し合いで設定するルールや方針のことで、「相互の主張や発話内容、発話の意図を正確に理解するために厳密な言語学的知識に加えて、会話の参加者が保持している事が必要となる、ひと揃いの暗黙の理解」(Edwards & Mercer, 1987; 松尾・丸野, 2008) を指す。中野 (2023) の

研究では、グループでルールを決めることがチームビルディングとして機能し、「やりづらさ」の解消に効果があることが示唆された。しかし、初心者には何が適切なルールか判断が難しいという課題も示された。経験者が策定したルールを蓄積し、リストを提示することで GR 策定の支援ができると考える。

そこで本研究は反復的な GD において GR を複数回、策定したことのある経験者に質問紙調査を実施し、その分析結果を基に GR を用いた効果的な支援方法を提案することを目的とする。

2. 方法

大学生の GD の初期熟達化における効果的な GR を検討するために、15 回のうち 13 回の講義で GD を実施し、後半で GR を導入した教養科目の受講者を対象とした。この講義では約 60 分間の心理学の講義と約 30 分のグループワークで構成される。グループワークでは 4 名程度のグループで講義内容に関してディスカッションをしてもらった。第 3 回以降の講義では毎回、ランダムで席を替え、初対面の受講者とディスカッションする機会を設けた。講義では 10 分程度、GD の技法 (中野, 2018) に関する講義も行った。第 2~8 回

講義では「GR 無し」の GD を経験した後に第 9 回で GR について説明・導入し、第 9～14 回は「GR 有り」の GD を実践した。

第 15 回講義が終了した後に、各講義で GD の司会者を務めた受講者を対象に GR に関する質問紙調査を実施した。協力者に対して調査の趣旨の他、授業改善を目的としたもので回答内容は成績評価に一切関係がないことや、個人が特定される形で公表されることはないことについて説明し、同意を得た。調査は Microsoft Forms を用いてオンラインで回答してもらった。質問内容は作成した GR や、GR を講義で使用した感想等に関する 8 つの質問で構成される。

2022 年度後期から 2023 年度後期の期間に開講された 3 期の講義で調査を実施した。本論で分析した質問項目は、問 1「各講義で設定したルールをすべて教えてください」である。回答者 178 名から報告された GR の数は合計 255 であった。筆者を含む 2 名でこれらの GR のコーディングをおこない、49 に集約した。コーディングでは意見に不一致がある場合は議論により解決した。

3. 結果と考察

問 1「各講義で設定した GR をすべて教えてください」の回答を講義回に分けて集計した。結果を図 1 に示す。

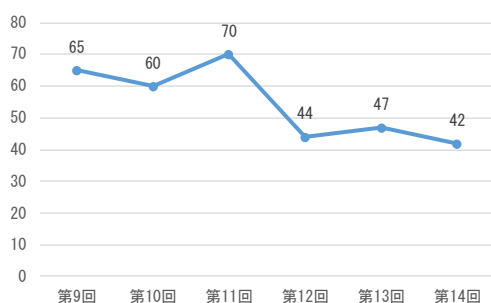


図 1 GR の数の変化

GR を導入した全 6 回の講義で最も多かったのは第 11 回の 70 であった。一方、第 12 回では 44 まで減少し、第 14 回は 42 と最も少なかった。この結果から GR 有りの GD の経験を一定程度、積むことで、設定される GR の数が減少することが示唆される。感想を参照すると「1 人ひとつ考えてすべて採用した」

等、GR を学習した直後は何が適切な GR かの判断が難しいため、提案されたルールを全て採用するケースが多かったことがうかがえる。一方、導入後 2 回目以降は、教員は GD を決める前に前回の GD の反省点を共有し、効果的な GD を議論して決めるように促した。その結果、GR の適切さや効果に関して過去の経験から精査され、採用される GR が洗練されたことで数が減ったのではないかと考えられる。また多くの GR を決めたとしても守るのが難しいという運用上の観点も考慮された可能性もある。

次に GR のコーディングの結果、5 つのカテゴリが抽出された:「発表前」「GR 全体」「意見」「発表者」「聴衆」。一例を示すと、「発表前」のルールは「論点を事前に決めておく」、「GD 全体」のルールは「時間配分に気を付ける」、「意見」のルールは「必ず 1 人一つ以上、意見を言う」などである。「発表者」のルールは「相手の目を見て発表する」、「聴衆」のルールは「わからない点は質問する」等である。カテゴリ別に GR をリスト化したものを提示することで初心者が GD で GR を作成する際の支援になるだけでなく、熟達化を促進することができる。と考える。

4. まとめと今後の展望

本論では、大学生の GD 支援を目的として GR 作成に関して経験者に調査を実施した結果をまとめた。発表ではこの結果を基に GR のリストおよび活用方法を提案する。

参考文献

- 松尾剛, & 丸野俊一. (2008). 主体的に考え、学び合う授業実践の体験を通して、子どもはグラウンド・ルールの意味についてどのような認識の変化を示すか. *教育心理学研究*, 56(1), 104-115.
- 中野美香 (2018) 大学生からのグループ・ディスカッション入門. ナカニシヤ出版
- 中野美香 (2022) 遠隔ディスカッションにおける「やりづらさ」と経験の関係. 日本教育工学会 2022 年秋季全国大会講演論文集, pp.373-374.
- 中野美香 (2023) 遠隔ディスカッションにおける「やりづらさ」と経験の関係. 日本教育工学会 2023 年秋季全国大会講演論文集, pp.373-374.